

# 仮設住宅における学生ボランティアによる支援

—東日本大震災の被災地として学ぶもの—

## NURSING STUDENTS' VOLUNTEER WORK AT TEMPORARY HOUSING

—LEARNING IN TSUNAMI DISASTER AREA OF THE GREAT EAST JAPAN EARTHQUAKE—

長橋美榮子<sup>1)</sup> 菅原 尚美<sup>2)</sup> 田渋あづさ<sup>3)</sup>

Mieko NAGAHASHI Naomi SUGAWARA Azusa TASHIBU

キーワード：看護学生、ボランティア活動、東日本大震災、被災地、仮設住宅

Key Words：Nursing students, Volunteer work, The Great East Japan Earthquake, Tsunami disaster area, Temporary housing

### 要 旨

平成23年3月11日、マグニチュード9.0の東日本大震災は、本学の所在地である仙台市若林区の沿岸地域にも、津波による大きな被害をもたらした（図1・2）。仙台市若林区では、平成23年5月から応急仮設住宅として696世帯分のプレハブ住宅が供給され、多くの住民が避難所から移り、余儀なく仮設での生活を営んでいた。

発災時より被災地には全国から多くの学生がボランティアとして訪れていた。被災地に隣接し、自身も被災を受けた体験を持つ本学の学生が住民との交流を継続していくことは、被災住民にとってはもちろんのこと、看護を学ぶ学生にとっても今後の災害看護に向けた学びの一つとして、とても貴重な機会と考えた。そこで、若林区保健福祉センターにボランティア活動を申し出て、平成25年6月から若林区A仮設住宅で活動を開始し、平成27年12月まで3年間のボランティア活動を継続することができた。

A仮設住宅で生活を営む方々は、平成28年までに全戸が復興住宅他に転居を予定しており、発災から5年を経て仮設住宅の役割は終わろうとしている。そこで、これまで3年間の、若林区A仮設住宅における学生ボランティアと住民との交流を振り返り、学生ボランティアの活動の意義について考察したい。

尚、図で使用した資料データは許可を得て使用している。

1) 2) 仙台青葉学院短期大学 3) 元仙台青葉学院短期大学  
受理日：2016年8月1日

## I. ボランティア活動の準備

### 1. 若林区内の被災者の状況と支援についての情報収集

平成24年12月、看護学科教員2名は、若林区保健福祉センターを訪ね、保健師の話を伺った。発災から2年目になり、仮設住宅から新居への移転に希望を持ち始めている方、新たな職と共に、生活を築いている方がいる一方で、思うようにならない生活環境や経済的な背景の中、不安と共にある人々もあり、それぞれの住民の生活状況の違いから様々な感情が生まれ、人間関係や公的機関との関係性にも新たな課題が生まれていた。社会福祉協議会やボランティア団体が支援を継続している中、本学の学生の活動として役に立つことはないか尋ねたところ、保健師等が交替で毎週1回「若林区A仮設住宅」でのラジオ体操の巡回に行っており、そこで学生ボランティアの協力が得られるとよい効果があるのではないかと情報をいた



図1. 仙台市の津波浸水区域（点線囲み）



図2. 仙台市若林区の津波浸水区域

だいた。我々は、ラジオ体操の日程と本学学生の時間割とを検討すべく、情報を持ち帰った。

### 2. 活動日時や交通手段の検討

A仮設住宅は仙台市若林区に所在しており、平成23年5月に約200世帯が入居した。

A仮設住宅では、毎日9:30~10:00まで集会室にてラジオ体操を中心にストレッチ、地区のオリジナル体操（「手のひらに太陽を」の歌）、歌謡曲にあわせた体操を行っている。参加者は1日10名前後でありその殆どが高齢者である。仙台市若林区保健福祉センターの家庭健康課の保健師が週1回の巡回で体操に参加する住民を支援しており、その活動に学生も参加することになった。

まず、A仮設住宅の体操の時間と看護学科の時間割とを照らし合わせ、学生が参加可能な時間帯を検討することから始まった。往復の交通手段としてバス利用が可能な地域であったが、それでは授業時間までに学校に戻ることができず、教員の自家用車による送迎、あるいはタクシー利用を検討した。また、教員2名は日程調整を重ね、授業や病院実習指導の合間をぬって、ようやく月に2回の活動日を捻出することができた。活動計画を家庭健康課に提出し、月2回、1年間の活動を実施することになった。

### 3. 学生有志の募集とサークル認定

平成25年6月、看護学科1~3年生に活動の趣旨を説明し、有志を募集した。1年生15名、2年生7名、3年生3名が賛同した。さらに、学校のサークル認定を得ることができた。

ボランティア活動の目的は、「仮設住宅にお住まいの方々にとって、ほんの少しでもほっとできる場、元気な力に触れられる場を創り、提供する」とした。そして、支援する者、支援を受けるものとしての関係ではなく、その時を共に過ごし、時間を、思いを、笑顔を共有する存在でありたいという気持ちを活動のキーワードにした。

## Ⅱ. ボランティア活動の実際

### 1. 平成25年度の実績

平成25年6月より、月2回、通算19回、学生10名ほどと一緒に若林区A仮設住宅を訪問し、9:30～10:00のラジオ体操に参加した。まず10分程度の軽体操を行ない、その後5分程度ストレッチ、次にラジオ体操、地区のオリジナル体操、歌謡曲に合わせた体操などを10分程度行なった（資料1～3）。参加する住民の方々の人数、年齢、意向を尊重して、それらの体操を組み合わせで行なった。導入部分の軽体操は、教員が主導でストレッチや簡単なゲームなどを工夫し実施した。

学生は毎回入れ替わりで参加している事が多いため、毎回初心者ということも珍しくなかったが、住民の方々は次第に学生の訪問を楽しみにして下さるようになり、体操をしながら笑い声があがるようになっていった。一方学生側は、日常高齢者とのかかわりが少ないものもあり、コミュニケーションに不安を持っているものもいたが、住民の皆さんが温かく迎え入れてくださることで、打ち解け、日常のことを楽しく話すことができた。帰りの車中で、次回のかかわり方について工夫点を相談する様子も見られ、実習等で高齢者とかかわることの多い看護学生にとっては良い体験の機会となった。殆どは1～2年生による活動であったが、長期休みの時期、実習のない週には、3年生も参



資料2. 椅子を使ったストレッチング  
(仙台市健康増進センター発行より)



資料3. レクリエーション（フルーツバスケット）で  
使用した手作りのカード

加した。

1年間の活動を終了するに当たり、再度、家庭健康課と打ち合わせを行なった。担当保健師より、いろいろなボランティア団体が支援しているが、住民にとっては活動が一時的であることで見捨てられたような感覚を抱かせてしまうため、回数は減らしても継続することができないかという提案をいただいた。そこで次年度も何とか時間を捻出し、活動を継続することを決めた。

### 2. 平成26年度の実績

年度当初に新入生も含め再度サークルメンバーを募集した。1年生13名、2年生9名、が賛同した。

活動日は、月に1回とし、前年同様に学生と担当教員2名で訪問した。2年目に入り、特に2年生は活動に慣れてきたこともあり、導入部の軽体



資料1. 指先体操  
(齋藤道雄監修：高齢者イキイキ！ 音楽レクリエーション、西東社、2013. より)

操を学生が担当することも多くなった。また、次第に住民も学生の訪問時間を体操だけではなく、お茶会の機会としても楽しんでくださるようになり、時間に余裕がある時は、飲み物や菓子、住民の方の手作り漬物などを頂きながら、30分程度談笑することもあった。住民の方々からは最近のイベントや旅行に行った話題を話してくれたり、学生の授業などについて質問があるなど、お互いに関心を向け合いながら話すことができた。

12月には、そば打ち体験会のイベントを手伝うことができ、通常の活動日以外でも住民の方々の触れ合う機会を得られた。

### 3. 平成27年度の実績

活動は3年目に入った。教員2名のうち1名が新任教員と交代し、サークルメンバーを再募集し、看護学科3学年合わせて33名が登録した。1か月に1回のペースで計画したが、9:30~10:00の活動時間に授業時間が重なることが多く、参加できる学生が限られたため、平均2~3名の学生と教員1、2名、日によって教員のみによる訪問となった。

活動内容は、ストレッチや各種体操、学生が準備してゲームを取り入れたレクリエーションを実施した。ホワイトボードにイラストを描いて解説しながら行なった指体操は、学生が主体となって運営し、場の雰囲気を盛り上げて、住民の方々の笑顔を引き出すこともできた。恒例となった活動後の談笑の時間は、住民の方々と学生が世代を超えて交流する機会ともなった。そこでは、仮設住居の退去の期限が迫っていることや、それぞれ別の復興住宅に入居することになるため、新たな人間関係をつくることに不安を抱いている住民の話を聞くことができた。

一方で授業時間の変更等によって度々活動計画を変更せざるを得なくなり、不定期開催となってしまったことは、今年度の反省すべき点である。

### Ⅲ. アンケート調査の実施

平成27年度をもってボランティア活動が終了す

ることとなり、これまでのボランティア活動を振り返り記録に残すことで今後のボランティア活動に役立てることを目的とし、アンケート調査を実施した。

#### 1. 調査期間：平成28年3月4日から3月11日

#### 2. 調査対象

ボランティアサークルに登録している33名のうち、活動に参加していない1年生等を除いた19名とした。

#### 3. 調査方法

携帯電話のメール機能を利用し、質問に対する返信をもって、調査協力に同意が得られたこととした。①ボランティア活動から学んだこと、②ボランティア活動で感じたこと、③被災地にある看護学校の学生として自分にできることの3点について質問した。

#### 4. 調査結果の分析方法

質的帰納的方法で分析した。回答内容は、研究者2名により意味内容ごとに分類し、カテゴリ化した。

#### 5. 倫理的配慮

回答内容は、個人が特定されないよう記号化した上で、直ちにUSBメモリに保存し、研究者が鍵のかかる研究室で管理した。データの保存後、返信されたメールは削除した。

#### 6. 結果

2年生5名、3年生4名の計9名（回答率47%）から回答が得られた。回答は、質問項目ごとに①ボランティア活動から学んだこと、②ボランティア活動で感じたこと、③被災地にある看護学校の学生として自分にできること、の3つの項目で分析し、その結果を項目ごとに述べる。カテゴリを【 】とし学生の記述は< >で示した（表1）。



表1. 学生アンケートの結果

<b>1. ボランティア活動で学んだこと</b>	
【仮設住宅で生活するということ】	<p>&lt;震災に負けずお互いに支え合って生きている&gt;</p> <p>&lt;人との関わりであったり笑ったり声を出したりすることがとても良いことである&gt;</p> <p>&lt;体を動かしたり、誰かと話をするというような当たり前の生活が当たり前ではなくなる&gt;</p> <p>&lt;体を動かすきっかけを作ることが大切&gt;</p> <p>&lt;コミュニティーの場があることが大切&gt;</p>
【ボランティア活動をするものの意義】	<p>&lt;1年生のころは共感することが大切だと思っていたが、共感する以外にも、直接仮設住宅に行き、一緒に時間を過ごすこと・楽しむことも大切であり、私なりの役目だったのだということが分かった&gt;</p> <p>&lt;来てくれるだけで元気が出るよと声をかけていただき、活動する意義を感じることができた&gt;</p> <p>&lt;人の役に立つことの素晴らしさを感じた&gt;</p> <p>&lt;自分たちがボランティアをすることで誰かが笑顔になったり喜んでくれることがとても嬉しかった&gt;</p> <p>&lt;ボランティアサークルのみんなと高齢者の方々が少しでも楽しく過ごしてほしいという同じ目標に向かって協力することの大切さを学んだ&gt;</p> <p>&lt;活動をすることで高齢者と体操や遊びをすることが好きな自分に気づいた&gt;</p>
<b>2. ボランティア活動で感じたこと</b>	
【被災者との関わりの難しさ】	<p>&lt;被災者の方とどのように接したら良いか戸惑った&gt;</p> <p>&lt;被災者の方に自分から話しかけることができなかった&gt;</p> <p>&lt;震災の話をした時に私も被災者だが(仮設住宅の方のような)沿岸部ほどの体験はしておらず、共感することが難しいと感じた&gt;</p> <p>&lt;震災の話をした時に自分はどうかしらいいのだろうと考えた時期もあった&gt;</p> <p>&lt;震災の話共有したり、体操をしながら一緒に体を動かすことで、次第に仮設住宅の方と打ち解けることができた&gt;</p> <p>&lt;今後ボランティア活動をするときは相手の気持ちを考えながらコミュニケーションを取るようにしたい&gt;</p>
【仮設住宅の課題への気づき】	<p>&lt;復興に向かっていく時と同じように復興した後も課題があるということ&gt;</p> <p>&lt;1人暮らしの高齢者などが住む仮設住宅に出向いて話を聞いたり、バイタルサイン 測定（血圧測定など）や体操を通してコミュニケーションをとり、社会からの孤立を防ぐことが大事&gt;</p>
<b>3. 被災地にある看護学校の学生として自分にできること</b>	
【看護の知識・技術を身につけること】	<p>&lt;医療従事者となって震災が起きた時の対策や多くの人の命を守ることができるよう、知識・技術を身につけたい&gt;</p> <p>&lt;しっかり勉強して資格をとって、人の役に立つことのできる医療者になること&gt;</p> <p>&lt;いつまた震災が起こるか分からないから、自分たちがきちんと勉強して立派な医療従事者になりたい&gt;</p>
【看護師となり地域で活動すること】	<p>&lt;(震災当時の)何もできない中学生としての自分ではなく、医療の知識と技術を身につけた看護師として地域に貢献したい&gt;</p> <p>&lt;地域に根差した看護師になって、ほかの地域で災害があった時は自ら行動すること&gt;</p> <p>&lt;看護師になってどこかで震災があった時はすぐに駆けつけて自分の経験をいかしながら看護活動をしたい&gt;</p>
【被災者・患者の心に寄り添うこと】	<p>&lt;復興は進んでいるがまだまだ心の傷が癒えない人がたくさんいると思うので、看護師として何らかの形で支援していけるようにしたい&gt;</p> <p>&lt;被災した方の心の傷は癒えていないと思う。看護師として働くにあたり、患者のところに寄り添う看護をしていきたいと思う&gt;</p>
【経験を忘れず伝え続けること】	<p>&lt;ボランティアで学んだことや実体験を色々な人に伝えていくことが役割だと思う&gt;</p> <p>&lt;被災した者として震災を体験していない人へ伝える、次世代へつなげていく&gt;</p> <p>&lt;私自身がこの震災を忘れないことが大切&gt;</p> <p>&lt;被災したという事実を忘れないこと&gt;</p> <p>&lt;震災を忘れないこと&gt;</p> <p>&lt;今でも苦しんでいる人がいることを忘れないこと&gt;</p> <p>&lt;これからも同じような経験をするかも知れないと想定して、防災に対する意識を保つよう呼びかける&gt;</p>

## 1) ボランティア活動から学んだこと

ボランティア活動から学んだこととして、【仮設住宅で生活するということ】【ボランティア活動をするものの意義】が抽出された。

【仮設住宅で生活するということ】として、  
 <震災に負けずお互いに支え合って生きている>  
 <人との関わりであったり笑ったり声を出したりすることがとても良いことである>  
 <コミュ

ニティーの場があることが大切>などがあがった。  
 ボランティア活動に参加することで、住民と話をする機会が得られたことや、体操やお茶を飲むなど住民同士の交流を垣間見ることによって、学生は仮設住宅での実際の暮らしを知る機会となっていた。住民同士支え合っていることや、交流の場が大切であるということは、仮設住宅の住民の方々と直接関わってこそ得ることのできた学

びである。柏葉らは、看護基礎教育における災害ボランティアの教育効果に関する研究を行い、学生は災害ボランティアという直接的経験を通して、テレビでは伝わらない現場の状況や、仮設住宅での生活の実態を学んでいると述べている<sup>1)</sup>。仮設住宅で生活するというのを、仮設住宅で活動するという直接的経験によって実感し、実際を知る機会になったと考える。

また、【ボランティア活動をすることの意義】として、＜1年生のころは共感することが大切だと思っていたが、共感する以外にも、直接仮設住宅に行き、一緒に時間を過ごすこと・楽しむことも大切であり、私なりの役目だったのだということが分かった＞＜来てくれるだけで元気が出るよと声をかけていただき、活動する意義を感じることができた＞などがあげられた。活動を経験すると、一緒に時間を過ごすことや一緒に楽しむこと、住民の方に会いに行くことがボランティアとしての役割ではないかと考えるようになっていた。富澤らの研究でも、学生は「話を聞き、悲しみや不安を共有することが、ケアにつながるのだと感じた」というように、話を聞くことがケアにつながると気づいていたと述べている<sup>2)</sup>。このことから、学生は被災者と接することにはじめ戸惑いがあったとしても、ボランティア活動を通して自ら考え、ボランティア活動の意義を見出すことができたのではないかと考える。

## 2) ボランティア活動で感じたこと

ボランティア活動で感じたこととして、【被災者との関わりの難しさ】【仮設住宅の課題への気づき】が抽出された。

【被災者との関わりの難しさ】では、＜被災者の方とどのように接したらよいか戸惑った＞＜被災者の方に自分から話しかけることができなかった＞＜震災の話をした時に自分はどうしたらいいのだろうと考えた時期もあった＞＜震災の話をした時に私も被災者だが（仮設住宅の方のような）沿岸部ほどの体験はしておらず、共感することが難しいと感じた＞などがあげられた。学生は被災者である仮設住宅の住民の方に、どのように、何

を話して良いのかや、自分に何ができるのだろうかかと戸惑いながら、活動に参加していたことが分かった。柏葉らも同様に、「学生である自分たちに何ができるのか」「被災者は学生を受け入れてくれるのか」「迷惑ではないか」「被災者に対して、どこまで話を聞いて良いのか」など、ボランティア活動に戸惑いを感じているとしながらも、コミュニケーションスキルとしてハンドマッサージ、また血圧測定などの技術の実施によって、被災者への癒しの提供ができ、自然に被災者の話を傾聴することができていたと述べている<sup>1)</sup>。本調査においても、＜震災の話を共有したり、体験をしながら一緒に体を動かすことで、次第に仮設住宅の方と打ち解けることができた＞と感じているように、同じ時間同じ場所を共有した経験と、体を動かすなどの活動がコミュニケーションツールとなっていて、自然と住民と打ち解けることができたのではないかと考える。

また、茶屋道らは、学生が行う現況調査や傾聴について、ある程度の困難さを抱えながらも、学生なりに被災者との関係性を解釈しながら言語化できたことや、被災者の方々の置かれた状況や心情に共感しながら、多様な価値観に触れたことは対人援助職における教育的効果があると述べており<sup>3)</sup>、学生は【被災者との関わりの難しさ】を乗り越えて、自ら学ぶことができているのだと考える。

【仮設住宅の課題への気づき】では、＜復興に向かっていく時と同じように復興した後にも課題があるということ＞＜1人暮らしの高齢者などが住む仮設住宅に出向いて話を聞いたり、バイタルサイン測定（血圧測定など）や体験を通してコミュニケーションをとり、社会からの孤立を防ぐことが大事＞があげられた。富澤らは、「災害サイクルの慢性期にあたる現在も疾患のコントロールや生活の改善等が必要であり、長期的な介入が継続して必要であると学ぶことができた」と、学生の看護の視点からの気づきについて述べている<sup>2)</sup>。＜1人暮らしの高齢者などが住む仮設住宅に出向いて話を聞いたり、バイタルサイン測定（血圧測

定など）や体験を通してコミュニケーションをとり、社会からの孤立を防ぐことが大事＞は、まさに看護学生ならではの視点である。既習の知識と技術を活用し、かつ看護の視点を持ちながら、看護学生だからこそできるボランティア活動の方法があることに、気づくことができたのであろう。

### 3) 被災地にある看護学校の学生として自分ができること

被災地にある看護学校の学生として自分に行き得ることとして、【看護の知識・技術を身につけること】【看護師となり地域で活動すること】【被災者・患者の心に寄り添うこと】【経験を忘れず伝え続けること】が抽出された。

【看護の知識・技術を身につけること】では、＜医療従事者となって震災が起きた時の対策や多くの人の命を守ることができるよう、知識・技術を身につけたい＞＜しっかり勉強して資格をとって、人の役に立つことのできる医療者になること＞などがあげられた。

また、【看護師となり地域で活動すること】として、＜(震災当時の)何もできない中学生としての自分ではなく、医療の知識と技術を身につけた看護師として地域に貢献したい＞などがあげられた。

【被災者・患者の心に寄り添うこと】では、＜復興は進んでいるがまだまだ心の傷が癒えない人がたくさんいると思うので、看護師として何らかの形で支援していけるようにしたい＞などがあげられた。

【経験を忘れず伝え続けること】では、＜ボランティアで学んだことや実体験を色々な人に伝えていくことが役割だと思う＞＜私自身がこの震災を忘れないことが大切＞＜今でも苦しんでいる人がいることを忘れないこと＞などがあげられた。原田らは、身近で災害が発生したとしても自分の生活に影響がなかった学生は災害への関心が低く、ボランティア活動や訓練参加の行動に結びついておらず、漠然とした危機感を抱いているものの、災害に備えて何ができるかまでは考えていない現状があると指摘する<sup>4)</sup>。一方で、身近に発生した

災害により自分や家族の生活に影響があった学生は、ボランティア活動への関心も高く災害看護への関心が高まっているとしている<sup>4)</sup>。ボランティア活動への参加経験をいかして、専門の知識・技術を身につけようという視点や、地域への貢献、心に寄り添う看護の実践をしたいというように、本調査における学生の記載からも、災害看護への関心が高まったことを示すものであると考える。

## IV. 3年間のボランティア活動のまとめと考察

ボランティア活動を通して学んだことの第1は継続することの大切さである。活動時間帯が平日の午前中ということで、時間割の空き時間を利用しなければならないこと、サポート教員の実習指導日を除いての日程調整は難しく、時には学生が参加できず、教員だけで訪問という場合もあったが、回を重ねるにつれて「つながる」ことを実感していった。しかし、学生が主体となってボランティア活動を継続させるためには、定期的な活動時間の確保や参加者の募集、サークルの存続と先輩から後輩への経験の伝達など、克服すべき課題が多く、野津らも「外部との連絡調整」や「活動資金」「地域交流経験の未熟さ」をあげ、学生だけでボランティアグループを運営することが困難であると指摘している<sup>5)</sup>。

また、体操以外に、学生の長期休暇を利用して、イベントを計画したいという思いもあったが、帰省する学生も多く、実現することが難しかった。野津らは、活動計画を皆で話し合い、ミッションを共有し、活動のモチベーションを高めることができないという課題を挙げている<sup>5)</sup>。仮設住宅で他のボランティアが催すイベントなどを聞くと、もっと住民のための活動がしたいという思いに駆られたが、実現することができなかった。しかし、体操やレクリエーションといった些細な活動をたとえ短時間であっても継続して実施したことで、住民にとってはそれが楽しみになっていたのだと、活動の意義を実感することができた。

家族形態の変化で祖父母との同居が少なくなり、高齢者とのかわりがない学生も多くなっている。



仮設住宅で生活する高齢者の存在を知り、仮設生活の厳しさも知ることができた。高齢者とのコミュニケーションが自然にとれるようになり、オリジナルの体操や遊びを、自分たちで企画し、進めることで、レクリエーションの学びとなった。また、仮設住宅で生活している人々の人間関係に触れることで、災害直後の支援だけでなく、その後の長期的な支援が必要とされることを考える機会となった。

## V. 災害後の復興状況と今後のボランティア活動の課題

若林区健康福祉センターでは、平成29年の地域コミュニティセンターの完成に向けて、平成28年から住民が自主的にサロンや運動グループを運営できるような、段階的な支援を行っている。震災から5年目を迎えようとしている現在、住民の缺状格差が、健康面においても顕著になってきていると言われる。阪神大震災の経験からも、復興住宅に暮らす住民の高齢化や孤立の問題が指摘されてきたが、同様に今後の住民支援の方向性を考えるに当たり、奥田が指摘するように、住民の心身へ影響をもたらすことに留意した継続的な支援と、個別性に留意した継続支援が求められ、失われた地域コミュニティの再建及び地域ケアシステムの構築は大きな課題である<sup>6)</sup>。

一方、ボランティア活動に関しては、看護学生の授業カリキュラムは3年間で100単位を修得しなければならないこと、長期の実習が組まれていることなどで、ボランティア活動を継続することは相当難しい。3年間の中では、回数も減らさざるを得なかったが、教員もやりくりして何とか継続した。本来の講義や演習などの学習のみでなく、実際に対象者に関わることで学びは大きい。実習もその一つであるが、地域に出て、状況に合わせて企画をしたり行動する体験は学生にとって貴重であると思われる。このような体験をどのように保証できるかが、本学の教育に求められると考える。

今後は行政などの長期復興支援の課題を共有し、

地域との連携を強化し、災害看護教育の一環として、ささやかではあるがボランティア活動を継続していきたいと願っている。



資料4. ボランティアサークルメンバー

## 引用文献

- 1) 柏葉英美, 奥寺三枝子(2014): 看護基礎教育における災害ボランティアの教育効果, 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 16, 1-9.
- 2) 富澤弥生, 小野木弘志, 菅原尚美・他(2014): 東日本大震災ボランティア活動による看護学生の学びに関する検討, 東北福祉大学研究紀要, 38(41), 199-220.
- 3) 茶屋道拓哉, 筒井睦(2011): 【特集】東日本大震災一被災地における支援活動の体験一, 5. 東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義, 九州看護福祉大学紀要, 12(1), 25-37.
- 4) 原田秀子, 田中周平, 張替直美(2012): 災害訓練への参加を通しての看護学生の災害看護についての学び, 山口県立大学学術情報, 5(5), 37-46.
- 5) 野津隆志, 門間由記子(2014): 東日本大震災支援のための学生ボランティア活動の課題 宮城大と兵庫県立大の事例より, 商大論集, 66(1), 41-51.
- 6) 奥田博子(2016): 東日本大震災から5年を振り返る 災害時(健康危機管理)における保健師の役割とは, 保健師ジャーナル, 72(3), 184-189.